

赤人「神岳に登りて作れる歌」の特質

森

斌

はじめに

万葉集の題詞・左注には、「山に登り」てうたつた、とする歌が何首かある。それらの歌を「登山歌」と呼称を与えれば、かかる歌を詠んだ著名な歌人は、高橋虫麻呂と山部赤人と言うことになる。現在であれば、登山も極ありふれたスポーツであり、日常で嗜まれる娯楽の対象ですらある。しかし、万葉の時代には里山であっても信仰・祭祀と結びつかない娯楽の対象としての登山などがあつたのであろうか、或いは山に登ること自体が一般論として信仰・祭祀に結びつくのであるまいか。とにかく赤人には、神岳に登つて歌を創作した長歌がある。この登山歌は、赤人長歌を代表する一首でもあり、岸正尚氏が注目する「恋」が用いられていたり、明日香故京を十二句も用いて饒舌に形容

していたり、対句にも優れた冴えを見せている。そこで、神岳に登る歌には、はたして登山歌としての特徴があるのかを探り、この歌の本質に迫りたい。

神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首并せて
短歌

三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる つ
がの木の いや継ぎ継ぎに 玉かづら 絶ゆることな
く ありつつも 止まず通はむ 明日香の 旧き京師
は 山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋
の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 河
蝦はさわく 見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば

(三・三三四)

反歌

明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらな

一、明日香の神岳

古事記にはヤマトタケルが伊吹山の神を討ち取りに登山をするが、神に打ち惑わされて次第に衰弱していく話がある。常陸国風土記にも富士山と筑波山とに親神が山登りをしているが、しかし山とは神の依代であったり、神そのものでもあつたりする。一般的には参拝するための登山がなされてきたことを、また歌垣が筑波や杵島の山で行われていたことを、記紀・風土記等の古代文献によって知る。その他国見や占いはじめとする祭祀儀礼が山頂等でも行われていた。

ちなみに、万葉集では山を描く時に、川も登場している例が多い。これは、聖なる山が神の住む所でもあり、そこでは生命の再生や復活が期待されたのであるが、海も同様であつた。元々襖ぎは海で行われていたらしいが、真水でも行うようになった。海の果たした役割が川へと廻つていく。そして海は川によって山と結びつけられるのである。さらに山と里に住む人間を結びつけるのが川であるために、山が主題の歌では省略されても、川を描いたのであるまいか。自然が立体的であるのは、或いは人間の生活が都会

と田舎との区分がまだ未分化であつたという反映かも知れない。

とにかく山を描写した里の人間をその山に結びつけるのが川であり、里に住む人間にとつては、川に導かれて山が存在するのである。一方、吉野等の聖地でも山と川が対句で描かれている。それは、山と川の神の存在にも関わるのであるが、やはり山川を一对で描くことが土地を必要且つ充分に誉めることになるからである。即ち、聖なる土地であれば宜しき水も必要なのである。藤原京では、大和三山・吉野山と宜しき御井がそれに当たる。吉野宮では高い山と清かなる川とが描かれて、それが祝福すべき土地の誉め言葉なのである。

さて、里山には神と目された山もあるし、神の依り代となる山もある。その里山には神岳、雷丘、御室山、神奈備山などの神そのものか、神の住む処に因む意味の名前がある。引用した赤人長歌の「神岳」とは、「雷丘」か、または「甘櫃の丘」と呼ばれる岡をいう。雷丘と言へば、雄略紀七年には、天皇が三諸岳の神の姿を見たいと言つたので、蜷嬴が大蛇を捉えたが、その大蛇が雷の如くであつたので、天皇が雷丘に放たれた、という記事がある。日本霊異記上巻第一話には、栖軽が雷を捕らえた丘が雷

の岡であり、死後も雷が碑文の柱に挟まり捕らえられた。説話の最後には、「所謂故京の時に名づけて雷の岡と為ふ」とあつて、地名由来譚に纏められている。とすれば雷にせよ、大蛇にせよ、いずれも水に関わる神の性格がある。一方、甘樫の岳を神岳とする時、それは如何なる事になるのであろうか。

皇極紀三年に、蘇我蝦夷と入鹿の親子が朝廷になぞらえて、この甘樫の丘に邸宅を建てた。甘樫の頂上からは、東に多武峰、西に葛城金剛連峰、西北には大和三山、藤原京、さらに南に橘寺、檜隈が一望の下にある。允恭紀に盟神探湯が行われた事を記録する。大和三山と比較すべきものではないにせよ、やはり神聖な鎮めの山であり、神奈備山でもある。

甘樫の丘は、現在物見の丘である。明日香故京を一望にする丘には、人々がこぞつて登る。しかし、赤人の時代は物見の丘ではなく、天皇をはじめとして万葉の歌人が登つて、なにやら願ひ祈る神奈備である。

ところで、神岳に登る歌は、人麻呂近江荒都歌（一・二九）に類似している。まず実景から説明して序としていること、「つがの木の いやつぎつぎに」が一致すること、長歌の結末部「もししきの 大宮処 見れば悲しも」が赤

人の結末部「みることに 哭のみし泣かゆ 古思へば」と類似するからである。勿論、赤人が古都明日香の荒廢に触れていないのは、近江の荒都をうたう人麻呂と異質である。

さて、赤人がどうして神岳に登つたのか。雷丘であれ、甘樫の丘であれ、物見とは考えられない。やはりそれは祭祀を行う登山であらう。雷丘であれば雨乞いに代表される農業や収穫の祭祀、甘樫の丘とすれば、国見を含む国土の平安を祈る祭祀等が考えられる。このような祭祀であれば貴人のお供であつて、さらにその貴人から歌を赤人が要請された、と考えられるのであるまいか。中西進氏は、神々しい岳に一宮廷歌人が登り得たのであろうかとして、「天皇の行幸に従つて登つたのだらう」とする⁽³⁾。伊藤博氏は、「ひよつとして、赤人は、後宮の高貴な人びとに従つて、今明日香に来ているのかも知れない」とする⁽⁴⁾。やはり一人旅して詠んだ歌というより、祭祀のため神岳に登つた貴人から要請されたために、赤人は人麻呂近江荒都歌の伝統を庶幾したのである。

ところで、登山による歌、即ち、祭祀のために登山した歌には、特徴と呼ぶべき性格があるのであろうか。

二、登山歌

山部赤人には、「登る」と題詞に記した長歌が二首ある。「神岳に登りて」(三・三三四)と題する一首と「春日野に登りて」(三・三三七)と題する一首とであるが、万葉集では「……登る」とする登山歌の用例としては、次の如くである。

①天皇の、香具山に登りて望国したまひし時の御製歌

(二・二一 題詞)

②神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首(三・三三二)

四 題詞)

③山部宿祢赤人の春日野に登りて作れる歌一首(三・三三二)

七二 題詞)

④筑波岳に登りて、丹比真人国人の作れる歌一首(三・三三二)

三八二 題詞)

⑤大伴佐提比古の郎子、特に朝命を被り、使を藩国に奉る。巖棹して言に帰き、稍蒼波に赴く。姜松浦〔佐用比売〕、この別るるの易きを嗟き、彼の会ふの難きを嘆く。即ち高山の嶺に登りて、遙かに離れ去く船を望み、悵然みて肝を断ち、黯然みて魂を銷す。遂に領布を脱ぎて磨る。傍らの者涕を流さずといふこと莫し。

これに因りてこの山を号けて領中磨の嶺と曰ふ。乃ち、歌を作りて曰はく、(五・八七一 題詞)

⑥同じ月十一日に、活道の岡に登り、一株の松の下に集

ひて飲せる歌二首(六・一〇四二 題詞)

⑦右は、神亀五年戊辰に大宰帥大伴脚の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。時に勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣して、喪を弔ひ并せて物を賜へり。その事既に畢りて、使と府の諸の卿大夫等と、共に記夷の城に登りて望遊せし日に、乃ちこの歌を作れり。(八・一四七二 左注)

⑧筑波山に登らざりしことを惜しめる歌一首(八・一四九七 題詞)

⑨筑波山に登りて月を詠める一首(九・一七二二 題詞)

⑩検税使大伴脚の、筑波山に登りし時の歌一首(九・一七五三 題詞)

⑪筑波山に登れる歌一首(九・一七五七 題詞)

⑫筑波嶺に登りて嬋歌会をせし日に作れる歌一首(九・一七五九 題詞)

⑬普老翁ありき、号を竹取の翁と曰ふ。この翁、季春の月に丘に登り遠く望むに、忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひき。百嬌儔無く、花容匹無し。時に娘子等老翁

を呼び嗤ひて曰はく「叔父来たれ。この燭の火を吹け」といふ。ここに翁「唯唯」を曰ひて、漸に越き徐に行きて座の上に着接る。良久にして娘子等皆共に咲を含み相推譲りて曰はく……「慮はざる外に偶に神仙に逢へり、迷惑へる心敢へて禁ふる所なし。近く狎れし罪は、希はくは贖ふに歌をもちてせむ」といふ。すなはち作れる歌一首（十六・三七九一 題詞）

⑭天平勝宝五年の八月十二日に、二三の大夫等の、各々壺酒を提げて高岡の野に登り、聊かに所心を述べて作れる歌三首（二十・四二九五 題詞）

以上の用例が「登山歌」の全てである。これらから知られることは、筑波山に關わっている歌が多くあつて、例として④⑧⑨⑩⑪⑫である。その筑波山とは、歌垣の行われる場所である。山に登り月を眺めて作る歌もあるが、登山の基本は筑波山で行われた歌垣の場であることに由来する。筑波山とは、常陸国風土記に、山の形容として二上であること、春秋に男女が飲食を伴う遊樂をすること、その時に謡われる民謡が沢山あること、さらに諺として、「筑波峰の会に娉の財を得ざれば、兒女とせずといへり」とある。男体山（八七〇段）、女体山（八七六段）の二峰からなる古代の信仰の山でもある。古代においては、双児峰は越中

の二上山も含めて聖なる場所である。万葉の時代から登山の対象になったことが知られる数少ない例でもある。

筑波山の登山といつても今日的なスポーツの性格が皆無であるのは当然として、遊樂を目的としている雅な宴の場が想定されるにせよ、やはり基本は信仰に基づく歌垣等の背景がありそうである。例えば、表面的には遊興と考えられそうな月見の歌、

天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らましく惜しも（九・一七二二）

も、「夜渡る月の入らまく惜しも」とうたうところに「月見」を主題とする登山という意味ばかりか、むしろ「歌垣」といった目的に付随した雅な遊藝の趣もそこにありそうである。即ち、月の隠れるのを惜しむという表面上の意味の背後に、それは歌垣の場である約束された夜の時間が過ぎ去ることに対する恨む気持ちを含んでいる、と理解されるからである。

一方、筑波山と対比される東国の代表的な山に富士山がある。赤人（三・三二七、三二八）と高橋虫麻呂（三・三一〇、三二二）の長歌群は、どちらも叙景歌であり、彼らが富士を旅中に見たという体験を踏まえた賛歌となっている。「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」（三二七）

や「駿河なる 不尽の高嶺は 見れど飽かぬかも」(三一九)と言う長歌の結東部は、伝統の賛歌表現である。ところが、赤人と虫麻呂を除く万葉例六首は、全てが作者の知られない相聞歌であつて、当然のことではあるが登山の対象になつていない。

東歌と巻十一とでは、少しく内容に隔たりがある。巻十一の二首(二六九五・二六九七)は、人知れない恋の思いを噴火する富士のイメージで表現している。人知れず密かに心で燃えよというのである。東歌の四首(三三五五・三三五六・三三五七・三三五八)は、その土地に生活する視点から詠んでいるのであつて、火柱の立つ富士という固定観念は見られない。しかし、共通するのは、恋歌に登場していることである。

その他登山の対象としての山は、①香具山、③春日野、⑤領巾山、⑥活道の岡、⑦記夷の城、⑬丘、⑭高円の野という一例ずつであるが、いずれも山登りでは里山の範疇に属する。

まず①の香具山は国見のためである。その香具山は、「天の」という頌詞が添えられる言わずと知れた聖山である。妻争いの三山歌(一・十三)がとりわけ著明であるが、『伊予国風土記』(『積日本紀』所収)に、天上にあつた天

の香具山が降つてきて、二つに分かれた一つが大和の香具山、もう一つが伊予の「天山」になつた、とある。記紀によれば、香具山の植物を祭式に用いたり、宮廷の祭儀が香具山で行われたりしている。神武紀に香具山の土を採つて、国土を占有するための呪術が行われたとある。大和国の鎮めの山が香具山であつた。万葉集では、鴨足人が故郷の山としているし、大伴旅人がやはり故郷を象徴するものとしている。とりわけ、藤原京では持統天皇の「衣乾したり天の香具山」(二一八)ともうたわれている。明日香・藤原時代のシンボルの山である。

⑤領巾山は別れのために領巾を振るための山登りである。山の頂、峠、あるいは国境などでは、領巾をふつて別れを惜しむのである。領巾振り自体に意味があることは無論のことであるが、高いところから別れを惜しむのは、古今を通じて共通の感情である。

一方、雷岳、甘檀の丘、香具山等に登るといふ行為の背景とはやや異なるのが⑥活道の岡、⑬丘、⑭高円である。活道(いくじ)とは、生きる道とも解釈されるのであるが、家持が安積皇子を悼んだ挽歌に「御心を見し明めらし活道山」(三・四七八)とあつて、心を晴れやかにさせた山として出てきている。これらの山登りには、行楽による

宴席の場も当然考えられる。

⑦記夷の城では眺望を楽しんでいるが、ここに築紫における旅人を中心にした文芸の世界がある。雅なことが優先するのであろう。登山歌が全て祭祀に結びついているものでもないが、行楽的な山登りも例外的に存在することも事実である。

さて、赤人が詠んだもう一首の③登山歌に登場する春日野とは、野遊びの場所でもあった。巻十には、

煙を詠める

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも（一八七九）

野遊

春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶ今日の日志らえめやも（一八八〇）

春霞立つ春日野を行き帰りわれは相見むいや毎年にも（一八八一）

春の野に心展べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか（一八八二）

ももしきの大宮人は暇あれや梅を挿頭してここに集へる（一八八三）

と、歌が一括して載せられている。

赤人の長歌にある「春日を 春日の山の」（三・三七二）

という冒頭は、「春日を」という枕詞がこの一例だけというばかりか、春という季節と、山であれば筑波の歌垣、野であれば野遊びを連想する。叙情の中核である結東部の三句は、「立ちてゐて 思ひそわがする 逢はぬ見ゆゑに」とあるのは、この歌が相聞の内容であることを如実に示している。このことは、春日野が東国筑波の中央版であることを暗示しているのであるまいか。万葉集で「春日野」をうたっている例は、相聞歌が圧倒的である。

春日野とは、三笠山、香山、花山等を春日山というのであるからそれらの山を背景にした野である。今でも春日大社などもあって鬱蒼とした原生林も残されている。野でありながら、「登」というのであるから、そこには山と同様の発想があった。野に登るとは、春日野の山に登るということになる。それは、長歌と反歌に「高座の 三笠の山」を登場させるのである。野に登り歌垣、乃至は野遊びに参加しているのである。そのような雰囲気に基づき創作されたのであろう。

では神岳とは、どういう山であるのか。名称に神聖を冠せられているのであるから、神が住む特別な山であり、信仰などの対象でもあろう。神岳を雷の丘と考えれば、柿本

人麻呂の、

大君は神にし座せば天雲の雷の上に慮らせるかも(三・二三五)
も思い出される。

人麻呂が神とする持統天皇は、吉野賛歌では国見をするのであるが、雷の丘では仮の宿りをされている。持統が吉野に在位期間に三十一回も行幸しているが、その理由の一つに聖地に赴き、生命の復活・再生などの祭祀が試みられていたのかも知れない。とにかく高いところからの眺望を期待して、川の美しさに惹かれて吉野に行ったわけではない。この雷の丘には、何故に行幸して、宿りをされたのであろうか。香具山、吉野のみならず筑波山にも国見が登場するが、神岳でも天皇行幸が行われ、国見の儀式等が行われていたのであろうか。何らかの祭祀のために神岳登山が為されたことは間違いない。

三、対句表現

神岳に登る長歌の特徴は、まず対句表現にある。人麻呂にも山と川、春と秋、朝と夕べ等の対句表現が試みられているが、赤人のそれとは比較出来ない。例えば、吉野賛歌という統一した主題の作品を比較しても明かである。

全体が二十五句からなる神岳登山長歌は、まず約半分の十二句で故郷でもある旧き都を提示する。第十三目句の「山高み」から第二十二目目の「河蝦はさわく」までの十句が、明日香を対句で描写している。その対句の基本は、山と河を対照させているところにある。試みに、山と河を意味で整理する時、

(山) 高 春 日 見 朝 雲 鶴 乱

(河) 雄大 秋 夜 清 夕 霧 河蝦 驟

と行うことになる。

即ち、山と川の対照は、春の日と秋の夜、朝雲と夕霧、鶴と河蝦、さらに高みと雄大し、見がほしと清けし、乱れと驟(さわく)という対応を示しているのであるから、まさしく徹底的な対句構成の長歌である。旧都が山が高く、河が雄大であるとは、誉め言葉であるが、一体どういう明日香の事実に基づくことなのであろうか。また、現実に見ている写実の景観とは考えられない。春に山を見たい、秋に河がすがすがしい、さらに朝雲に鶴が乱れ飛び、夕霧に河蝦が鳴き叫ぶとは、どう言う背景を持つ表現なのであろうか。本質は、旧都を追慕しているにせよ、赤人の望み見ている現実に基づき想像力をかくも対照させて描写させたのは、既に季節を越えた神話世界とも言える内容である。

ここにあるのは、赤人の創造した理性の世界である。

描写は、静止的な、また絵画的な描写が続いた後に、「鶴は乱れ」「河蝦はさわく」という視覚と聴覚にうったえる描写に展開するが、この発展は、景を静止から動態へ、空中から地上へと言う立体を描くことになった。

さて、対句に拘泥した歌と言うことでは、額田王の春秋争いをうたった長歌(一・十六)が参考になる。そこには、春と秋との比較があるが、さらに鳥と花、山と草、黄葉と青葉等を対照させているが、全体十八句からなる長歌でありながら、春の描写が十句、秋の描写が六句という非対称を示し、さらに結論が「そこし恨めし 秋山われは」という意外な展開になっている。

ちなみに赤人の作品で対句に拘りを示している作品は、吉野賛歌(六・九二三、九二六、一〇〇五)である。これらの吉野賛歌は、小野寛氏の指摘する「…は型」の長歌形式が一致するのであるが、対句によって叙述の展開が試みられたことでも同質である。

山部宿祢赤人の作れる歌二首并せて短歌

I やすみしし わご大君の 高知らず 吉野の宮は 豊
づく 青垣隠り 川次の 清き河内そ 春べは 花咲
きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いやま

すますに この川の 絶ゆること無く ももしきの

大宮人は 常に通はむ(六・九二三)

II やすみしし わご大君は み吉野の 秋津の小野に
野の上には 跡見す置きて み山には 射目立て渡
し 朝猟に 鹿猪履み起し 夕狩に 鳥踏み立て 馬
並めて 御猟ぞ立たす 春の茂野に(六・九二六)

III 八年丙子の夏六月、吉野の離宮に幸しし時に、山

部宿祢赤人の、詔に应へて作れる歌一首并せて短歌
やすみしし わご大君の 見し給ふ 吉野の宮は 山
高み 雲そたな引く 川速み 瀬の音を清き 神さび
て 見れば貴く 宣しなへ 見れば清けし この山の
尽きばのみこそ この川の 絶えばのみこそ ももし
きの 大宮所 止む時もあらめ(一〇〇五)

赤人が詠んだ吉野賛歌三首の特徴は、Iが人麻呂吉野賛歌(三六・三七)の宮誉め、IIが人麻呂人麻呂吉野賛歌(三八・三九)の君誉めを踏まえているが、対句と言う点では、山と河の対比を基調とした対句と国土支配儀礼に基づく狩猟を対句でそれぞれ描写している。IIIで引用した吉野賛歌は、明らかにIの吉野賛歌と同質の山と河を基準にして対句で吉野の宮を形容している。IとIIIの対句数は、十二句であり、宮を徹底的に山と河との比較で描写している。

IとⅢの長歌を山と川で対句を意味で整理すると次の通りである。

I (山) 量 青垣隠 春 花咲 ますます

(川) 川次 清河内 秋 霧立 絶ゆること無く

Ⅲ (山) 山高 雲たな引く 神さび 見れば貴 尽き

ばこそ

(川) 川速 瀬の音清 宜しなへ 見れば清 耐え

ばのみこそ

吉野賛歌と神岳登山歌の対句に対する形容の拘りとしては、同質のものもありそうであるが、やはりそこには根本的な相違を認めなければならない。即ち、日と夜、朝と夕、さらに鶴と河蝦と言った詳細で多面的な表現の発展が吉野賛歌に見られないことである。そこには形骸してしまつた吉野歌の伝統がある。神岳に登る歌の特色である対句表現の多様な対応こそが登山に基づく視野の拡がりをもたらしたものでないか。即ち、鶴が乱れ、河蝦がさわぐという描写の展開などに繋がるのであるまいか。或いは、朝と夕、春と秋なども人麻呂時代に完成した対句であるが、赤人が用いたのは、山から見るという視点があるのであるまいか。対句の冴えを神岳に登る長歌が示すのは、高いところから見る、即ち鳥瞰する行為に基づく視野の拡がりによる、と

考えられるのである。

吉野宮と明日香故京をそれぞれが形容して提示する表現は、さらに異なる。吉野賛歌では「やすみしし わご大君の高知らす 吉野の宮は」(九二三)であり、「やすみしし わご大君の 見し給ふ 吉野の宮は」(二〇〇五)であるのに、神岳の歌は「三諸の」から始まり「旧き京師は」までが十二句も用いていることである。しかも、実景と思える「五百枝さし 繁に生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎに」等にも示されている明日香旧都に対するこの拘りは、赤人の何に依るのであろうか。

明日香とは、推古天皇、舒明天皇、皇極天皇、孝徳天皇、齊明天皇、天智天皇、弘文天皇、文武天皇、持統天皇、文武天皇が都としていた。孝徳天皇、天智・弘文時代に一時期難波と近江に都が移されているが、元明天皇が奈良に遷都する以前約百二十年ほど都がおかれていた。

奈良で脚光を浴びることなく日々鬱々としていた宮廷人にとつて、明日香という旧都は、憧れの土地であつた筈である。しかも、歌人としては聖武天皇の時代に活躍していたにせよ、文武朝以前の誕生と推量されるのであるから、赤人にとつても明日香が故郷でもあつた。嘗て志貴皇子が難波で詠んだ歌もある。旅人も明日香を偲んでいる。明日

香とは、万葉集の第三期に属する歌人にとっては、故郷なのである。

ちなみに赤人は明日香に遷都を望んでいたのであるまいか。孝徳天皇の難波長柄豊碇宮は、七年程、天智・弘文天皇の近江大津宮は、六年程それぞれ都でありながら明日香に戻ってきた。明日香から離れたくて遷都したのであるが、また旧都に復帰する。大化の改新による難波遷都、天智と孝徳との不仲を暴露した明日香遷都、さらに白村江の戦いに破れた後の近江遷都、さらに壬申の乱の争いで勝利した明日香遷都と言うように、改革が挫折する度に、明日香に舞い戻っている。律令制度の発展を国家の根本としていながら、精神の拠り所が明日香にあつて、律令都市難波、律令都市近江から明日香に遷都している。

さて、その飛鳥時代には、幾度か明日香から遷都が試みられているが、政治的な節目に関わるのが明日香からの遷都であるし、明日香への遷都である。難波も近江も近代的な律令体制の為に試みられた都であつた。明日香の旧貴族達から自由になるために遷都したとも言える。しかし、赤人の歌は人麻呂の継承である。その立場からは、赤人も平城から明日香に遷都することを密かに望んでいたのかも知れない。それが「古思ほゆ」という歌語に表白されたので

あろうか。

四、「古思ほゆ」

さて、神岳の登山歌の特質は、「古思ほゆ」と言う心情を「恋」と言う言葉で表現したところにも指摘できる。そこで赤人の評価は、羈旅乃至従駕での創作に重点があるのであるが、少しく配慮したい歌がある。それは、相聞歌の内容を示しながら卷三の雑歌に収められている登山歌である。岸田正尚氏は、神岳登山歌と次に引用する春日野登山歌とが表現構造で同一のものとしている。^⑦

春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝さらす
雲ゐたなびき 容鳥の 間なく数鳴く 雲居なす 心
いさよひ その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のこと
ごと 夜はも 夜のごとごと 立ちてゐて 思ひそわ
がする 逢はぬ兒ゆゑに (三七二)

反歌

高桜の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするか
も (三七三)

春日野の歌が赤人の典型的な恋歌らしい雰囲気が見られるが、相聞の部に入れなかつた作家事情として、鈴木日出男氏は「甘美な風景の謳歌」を本質とするからである、と

理解を示す⁽⁸⁾。或いは、貴族が集う宴席での歌であれば、雑歌の範疇になるのかも知れない。しかし、挽歌の発想でうたわれた相聞の内容は、注目される。

一般的には従駕などでも恋歌の発想を笠金村などは取り入れている。赤人も例外ではなかったはずである。赤人長歌の特徴を分析した小野寛氏は、その構成から長歌を四つの型を考えている。それぞれは、『……は』型、『……に』型、『……見れば』型、『一旦終始型(二段)』と呼称するが、春日野に登る歌を一旦終始型に分類している。神岳に登る歌は、いずれにも属さないとして、番外にした。敏馬浦を過ぎる時の歌(六・九四六)を、小野氏は一旦終始型に一括分類して、春日野に登る歌と同じ範疇に入れている。この一旦終始型の歌は、この二群共に赤人の歌では珍しい相聞歌の内容があり、なお恋歌の雰囲気までがある。

ちなみに、赤人には相聞の部立に載る歌がない。歌は全て雑歌と挽歌である。その挽歌も伝説に素材した勝鹿真間娘子に対する巻三・四三二〜四三三番のみであり、他の四十六首は雑歌である。

そもそも赤人の歌語には「恋ふ」が少ない。春日野に登る長歌の第十二句に「片恋」が使われ、反歌も「恋」が用いられている。まず赤人以外の片恋の歌八首(二・一一七、

一九六、八・一四七三、十一・二七九六、二八一五、十二・二九三三、三一〇一、十七・三九二九)について考えてみたい。

人麻呂挽歌一九六番に用いられている片恋に赤人の発想が似ている。この人麻呂歌は、明日香皇女の殯宮挽歌であり、皇女の夫がぬえ鳥の如く、朝に片恋して行ったり来たりする様子が引用した箇所である。また、鳥の片恋と言うことでは、一四七三番もある。この歌では不如帰の片恋がうたわれているが、大伴旅人は神亀五年に大伴郎女を亡くしていた。京師から大宰の長官旅人に勅使石上堅魚が使われ、その任が終わってから宴が催された時に詠まれた旅人の歌である。橘に郎女を、そして不如帰に旅人がそれぞれ譬えられている。他の六首は、人間の片恋を直接いうのである。

人麻呂はぬえ鳥の片恋を夫の比喩に、旅人は不如帰の片恋をやはり夫の比喩に、それぞれ用いて亡き妻を偲ぶのである。少なくとも鳥の片恋の歌は三首中で二首が挽歌の内容である。春日野に登る歌は、対句表現に色濃く挽歌の雰囲気があるのであるが、鳥の片恋をうたっていることにも原因がありそうである。次に赤人用いた「恋」の用例を反歌三二五番、反歌三七三番を除き取り上げれば、

①あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめ
やも（八・一四二五）

②恋しけば形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲き
にけり（八・一四七一）
ということになる。

赤人が恋う対象に選んだのは、春日野登山歌の三七三番は、逢えない子を対象にして「恋」が用いられている。この歌が唯一赤人の恋情表現になっている。次ぎに①一四二五番であるが、この歌は四首一組（一四二四〜一四二七）中のものである。

最初の一四二四番は、野のへの愛着が一夜の野宿になった、とうたう。期待した明日が、昨日と今日も期待はずれで、益々失望するのである。この一首は、風狂とまで見なされた野宿が前提にあることで更にむなしさがつのる。この様に期待と失望の連続の中で、桜がうたわれた。山桜を恋うるのは、儂い一生で在るが故に恋い焦がれるのである、とする。桜花がうたかたの存在であることで、むしろ桜花が限らない魅力になるのである。それを日々に咲くならば、と仮定の型で問うが、歌の発想は額田王に返歌した大海人皇子の、「紫草のにはへる妹を憎くあらば」（二二）と、言い、下句で何で恋などしようか、とうたう発想に同じである。

「日並べてかく咲きたら」といい、その仮定が成立しないのであるが故に、即ちはかない花の命で散るから、思い焦がれるのである。花に人の恋うる心情を重ねている赤人の美意識がそこにある。

②一四七一番は、不如帰の鳴き声を恋うる歌であり、それは藤の咲く時期と重なる。不如帰と藤の組み合わせでは、次の例がある。

藤波の散らまく惜しみ霍公鳥今城の岳を鳴きて越ゆなり（十・一九四四）

霍公鳥来鳴き響す岡辺なる藤浪見には君は来じとや（十・一九九一）

不如帰は、卯の花や橘がその組み合わせとしては一般的である。しかし、藤波と組み合わせたところに赤人の自贖が在ったかも知れない。類型と言つても決して単純な踏襲に止まらない才覚と努力がそこにある。

「恋」と言う赤人が用いた詩語を見てきた時、彼は春日野に登る歌を除いてその対象を女性或いは人間にすることがない。春日野に登る歌は、長歌「片恋」の対象が「逢はぬ児」であり、反歌「恋」の対象もやはり女性であるから、赤人の歌では、正面から女性に対する恋情表現を試みた例外的な歌と言うことになる。

さて、万葉集には「古思ふ」という歌語は、次の如くに使用されている。

- ①…… 旗薄 小竹をおしなべ 草枕 旅宿りせず 古思ひて（一・四五 人麻呂）
- ② 阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに（一・四六 人麻呂）
- ③ 磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ（二・一四四 意吉麻呂）
- ④ 淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ（三・二六六 人麻呂）
- ⑤ み吉野の滝の白波知らねども語り継げば古思ほゆ（三・三三三 土理宣令）
- ⑥ 玉くしげ見諸戸山を行きしかば面白くして古思ほゆ（七・二二四〇 古集中の一首）
- ⑦…… 処女らが 奥津城どころ われさへに 見れば 悲しも 古思へば（九・一八〇一 福麻呂）
- ⑧…… 朝宮に 仕へ奉りて 吉野へと 入り坐す見れば 古思ほゆ（十三・三三三〇）
- ⑨ 洪谿の崎の荒磯に寄する波いやくしくしくに古思ほゆ（十七・三九八六 家持）

以上の用例からは、過去にあった姿形、心情、自然を想

定して昔のことを思うのが「古思ふ」の意味である。昔といつても恋愛感情を想定して「古おもふ」と言うことはない。葦屋処女をうたった田辺福麻呂歌の⑦にしても、勇ましい男どもが先を競って妻問した昔であつて、恋情を対象にしていなない。

赤人が神岳に登つて歌を詠んだ。その創作の目的は、旧都明日香を悲傷するものである。過ぎ去つた明日香を懐かしむのは、明日香に都があつた天武・持統朝時代と赤人が活躍した奈良時代にずれがあるからであるが、本質は人麻呂が試みた近江荒都歌の再現として明日香荒都歌の誕生にあつたのである。永遠であるはずの明日香の自然は、嘗て存在したままの自然ではなく、異質な空間となつている。ところが、彼の心情は鎮魂に向かわず、あるべき自己の存在が理想とする姿を古京明日香に求めたのである。それが「古思ふ」を一人寂しく人を求める恋情を表現する「恋にあらなくに」と結びついた。また、明日香川にいつもかかる霧の如くにはれないことを「川淀去らず立つ霧」と言う。それは、川淀に霧が止まりやすいことを観察して知っている赤人の確かな目を認め得る、ということである。この反歌は、川霧が川淀に止まりやすいという自然の微妙な機微を描写した良い例である。そして、懐旧の気持ち

情で表現したところに、人麻呂の伝統から一步放たれた展開になつていて、それは永遠を求めるといふことよりも、理想を探すといふ内容になつた。鎮魂が天國を見いだそうと変質したのである。

赤人の根底には、遅れて生まれた人と言ふ感情に充ちていたのであるまいか。人麻呂の時代であれば、宮廷歌人はためらうことなく賛仰の精神で歌をうたえた。ところが、聖武天皇は、行幸従駕の作を求めても、天平という律令体制のなかにある。唐を模倣した文化の時代、漢詩が宮廷文学の大通りとなつていた。彼の懐古の心情とは、人麻呂時代に戻りたい、と言ふことではなかつたのか。遅れて誕生したといふ気持ちで故郷明日香に強い憧れを抱かせたのである。

例えば、大宰府で小野老が、

あおによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛り

なり(三・三二八)

とうたう平城京に対して、大伴旅人が「故りにし郷し」(二・三三三三)といふのは、

わすれ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむが

ため(三・三三四)

とある香具山に代表された明日香である。

地方官である貴族が願うことは、帰郷であつた。旅人も神亀四年頃から天平年までが大宰府の長官であつた。彼が奈良ではなく、明日香に故郷を求めているのも平城京での不遇に原因があるかも知れない。故郷として登場している場所は、「亀の小河」(三三二)「香具山」(三三四)「わだ瀬」(三三五)等である。

結 び

山部赤人は、二首の登山長歌を創作していた。どちらの作品にも「恋ひ」等の歌語を用いていた。春日野に登るの歌は、相聞歌の形式を踏まえつつ、春愁詩の系譜にある。

人麻呂の作品では、石見相聞歌の影響が考えられて良い。

一方神岳の登山歌は、同じく人麻呂の近江荒都歌の影響にあり、過去と現在の対比が古を思い出させて、明日香の里が悲しみをつのらせるのである。神岳の登山歌とは、赤人の明日香の里に再び都が遷都する希望を含み持つ。人麻呂近江荒都歌が昔の人を鎮魂する主題である時、赤人の神岳登山歌は明確に主題を異とする。都の復活を望むという主題は、赤人の独自なものである。また、人麻呂は今と昔の明確な対立があり、今が荒廃している時であるという自覚がある。赤人には、今と昔の違いを認めても、明日香古京

の現状が荒廃していると言う認識にない。

さて、登山歌としての独自性とも言うべき性格が赤人のこの神岳登山歌に指摘できるのであろうか。対句が朝雲と夕霧、鶴と河蝦をいう風物を対比させて立体的に描写しているところは、赤人の他の作品と比較できない。それは、登山という行為から生まれた観察に基づく性格も認めたい。或いは反歌にある川淀を離れず立つ霧という表現の確かさも鳥瞰する目から生じたものかも知れない。また、眼前の景を序としている明日香京師の描写にしても、対句の冴え渡った表現にしても、平地からの発想に止まらなかつたからである。即ち、山から見た自然を、或は高いところから見て村里を描くと言うことは、物見の発想がそこにある、と言うことである。

赤人は、神岳に登った。そして、赤人は鳥瞰図的な描写をも獲得して長歌の表現に新しい領域を開拓していたのである。

〔注〕

(1) 「赤人の恋」―神岳と春日野でうたわれたこと―〔並

木の里〕三五号)

(2) 神岳が雷丘か、甘櫃の丘かと言う問題は、この論旨に結

びつかないのでこれ以上は触れないが、どちらかと言えば天皇が庵に宿泊された雷の丘に興味がある。

(3) 『古典鑑賞万葉の長歌上』 一五八頁

(4) 『万葉集釈注(二)』 一六一頁

(5) 「山部赤人の長歌の構成」〔駒沢国文〕 一八号)

(6) 山崎馨氏は、「山部赤人と聖武朝」〔国文学〕(二三―五)

で赤人と難波宮造宮との結びつきを指摘されている。要は、赤人が平城京で不平不満を持って作歌していたと指摘したのであるが、難波についてはさらに考えてみたい問題である。

(7) 注1に同じ。

(8) 「山部赤人の技巧」〔万葉集を学ぶ 第三集〕所収)

(9) 注5に同じ。